

※チラシは偶数月の第一日曜日に皆様にお届けしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

親のありがたみ

今年も茄子が花をつける季節になりました。淡い紫色の花を見ると思い出すのが「親の意見と茄子の花は干に一つも仇はない」のことわざです。茄子は花を咲かせると必ずといってよいほど実をつけることから、親が子を思っている意見は確実に役に立つので、しっかり聞くべきと、私は受け止めています。

このことわざの言う通り、私は父の教えに従ってきて良かったと、年齢を重ねるほどに感謝の気持ちが増らみます。忘れられないのは中学時代の運動会で800m走に出た時のことです。一番になりたい私は父は秘策を授けてくれました。「最終コーナーを曲がるまでトップの人の背後を走り、曲がってから一気に抜く。そうすれば相手は抜き返す

余裕がないから」と。とても単純明快な戦法のおかげでゴールテープを切ることができました。

約40年前の話ですが、その戦法は今も色あせることなく健在です。例えば仕事では、余裕があってもむやみに前に出るのではなく、一歩さがって状況を見極めて、ベストな形で完結させるのが私の理想です。

ファッションに一言言っても父からは、身だしなみについても厳しく躾けてもらった記憶があります。特に足元には細心の注意を払っていました。幼い頃、外出する時は姉と弟と私の三人が玄関に座って、洗いたての靴下を履かせてもらうのが常でした。私が社会人になって初めて出張に行く前の晩には、服に合わせて選んでおいた靴をピカピカ



に磨き上げてくれました。腰をかける時、片尻で座るとパンツにシワが入らないとも言われました。バミューダパンツはOKで、ショートパンツはNGとも。外出先から帰宅するとまず部屋着に着替える習慣も、ズボンの膝が出ることや極端に嫌がった父の影響だと思っています。

昭和一桁生まれにしては、今にも通用する確かな教えだったと、列挙してつくづく感じました。当時は特に意識することもなくやり過ごしていました。父の言動には多くのメッセージが込められていたのだと、今ごろになって思い知らされています。まさに「親の意見と茄子の花は干に一つも仇はない」でした。幼少期から導いてもらったおかげでストレスを感じることもなくひと通りのことはできるようになったと、親のありがたみを実感しています。

頼れる父を見送って20年が過ぎました。最後の7年間を離れて暮らしていたせいか、存在感は今も昔も変わりません。父を思い出すことは日常茶飯事です。ますます理解が深まっています。今、いてくれたら孝行娘ができたのにと、ただただ残念でなりません。この話を友人にしたところ、故人に対する一番の供養は、故人のことを思い浮かべ、思い出することと言われました。これからも父の教えを守りながら、行儀よく生きていこうと思います。



あなたのアーバンホール
アーバンホール

葬儀・法要・ギフト

習慣は自然のごとし

習慣は、深く身につけていくので、生まれつきの天性のようです。